

### 3 Canadian Raising と大母音推移

カナダとアメリカ合衆国の英語には、中期英語の [i:] に対応する現代英語の母音が、ある音声環境で [aɪ], 別の音声環境で [ʌɪ] の方言がある。この音声環境の分布は、有声子音の前と語末で [aɪ] (*ride, rise, fly* の母音), 無声子音の前で [ʌɪ] (*write, rice* の母音) であると記述されている。同様に、中期英語の [u:] に対応する現代英語の母音が、ある音声環境で [aʊ], 別の音声環境で [ʌʊ] の方言がある。音声環境の分布は、[aɪ] と [ʌɪ] の交替と同じで、有声子音の前と語末で [aʊ] (*loud, house* (動詞), *cow* の母音), 無声子音の前で [ʌʊ] (*lout, house* (名詞) の母音) であると記述されている。

[aɪ] および [aʊ] が基本形で、[ʌɪ] および [ʌʊ] が派生形である、というのが一般的な捉え方である。つまり、[aɪ], [aʊ] が無声母音の前で、[ʌɪ], [ʌʊ] に置き換わると分析され、**Canadian Raising** という名称が与えられている。Canadian Raising はアメリカ合衆国の地域方言でも観察されるので、カナダ英語に特有の現象というわけではない。以下では、Donegan (1993: 121-122) に基づき、Canadian Raising を**大母音推移 (Great Vowel Shift)** の一部と位置づける。中期英語の [i:] が [aɪ] に至ることで完結する大母音推移が、ある音声上の条件のもとで、[aɪ] に至る直前の [ʌɪ] で止まっていると捉える。重要なのは、上昇化 (raising) ではなく下降化 (lowering) だという点である。(同様のことが [aʊ] と [ʌʊ] の交替についても言えるが、大母音推移における位置づけを含め省略する。)

1400年代にはじまり1600年代に完了した大母音推移の一連の音の置き換えは、[æ:]--㊦→[e:]--㊩→[i:]--㊪→[ɪ]--㊭→[eɪ]--㊮→[ʌɪ]--㊯→[aɪ]である。*sea* の母音は元々は [æ:] で、㊦、㊩という2つの音の置き換えにより [i:] になり、*see* の母音は元々は [e:] で、㊩により [i:] になった。また、*ice* の母音は元々は [i:] で、㊪、㊭、㊮、㊯という4つの音の置き換えにより [aɪ] になった。

母音は**硬口蓋音性 (palatality)**、**唇音性 (labiality)**、**共鳴音性 (sonority)** という相反する3つの音声特徴・素性からなるという観点 (Donegan 1985: 49-69) から大母音推移の機能を示す。硬口蓋音性という素性は、「母音変異複数」の項の表で [Palatal] の母音を特徴づけ、これら硬口蓋母音は舌全体を前方に動かすことで調音される母音。唇音性は、表で [Labial] の母音を特徴づけ、これら唇母音は唇を丸めることで調音される母音である。共鳴音性は母音の高さと逆相関関係にある。他の条件が同じ場合、調音位置が低い母音ほど共鳴音性が高くなる。表で共鳴音性が一番高いのは Low の母音である。硬口蓋音性および唇音性と共鳴音性は

相反する関係にある。調音位置の高い母音ほど硬口蓋音性および唇音性が強くなる一方、共鳴音性は弱くなる。

大母音推移は母音の強化過程の典型である。母音の強化過程には(1)強勢を受けた母音に適用する、(2)ある特定の音声特徴を強める、(3)隣接音との違いを増大させる、などの特徴がある。強化過程は左側や右側にくる音がどのような音であれ行われる環境自由での音の置き換えが一般的(㉞, ㉟)である。強化過程は、また、環境依存での音の置き換えの場合もある。個々の母音の中のある音声特徴を強める点で、環境自由の場合と同じであるが、左側や右側にくる音との対比を増大させる(㊲, ㊳, ㊴, ㊵)。

硬口蓋音性を強める音の置き換え㉞, ㉟の名称が上昇化である。上昇化は、一般的に、Tense(硬口蓋音性・唇音性の強い方の母音)に観察される。このあと、共鳴音性を強める一連の音の置き換え㊲, ㊳, ㊴, ㊵が続く。[i:] (= [ij]) -- ㉞ → [ɪ]に見られるように、㊲は1音節内での母音の異化(二重母音化)の始まりである。第2要素には硬口蓋音性が保持され、第1要素との対比が徐々に増大していく。第1要素がLaxになることで硬口蓋音性が弱まり、そのぶん共鳴音性が強まる。㊳, ㊴は下降化である。下降化は、一般的に、Lax(硬口蓋音性・唇音性の弱い方の母音、硬口蓋音性・唇音性のない母音)に観察される。調音位置が低くなることで共鳴音性が強まる。㊵は脱硬口蓋音化(depalatalization)で、硬口蓋音性を失うことで、共鳴音性が強まる。

Canadian Raisingは、ある音声上の条件のもとで㊵が適用されず[ʌɪ]で止まっている、とする根拠が2つある。ある音声上の条件というのは、当該母音の長さが下降化を受けるのに十分な長さではないということである。(1)母音は後続子音がない場合と後続子音が有声の場合に長く、後続子音が無声の場合に短い、という音声学で周知の事実がある。(2)長い母音と短い母音を比べると、長い母音の方が下降化の傾向が強い、ということがDonegan(1985: 126-128)で例証されている。ひとつ例を挙げると、古期英語wicu weekの弱化母音は消失し、中期英語ではwicである。閉音節CVC中の母音は、w[ɪ]cのままであるが、開音節CV.CVC中の母音w[ɪ]kesは、**開音節長化(open syllable lengthening)**によりw[ɪ:]kesのように長くなったことで下降化を受け、w[ɛ:]kesになった。

(宇佐美 文雄)